

東京成徳大学大学院心理学研究科
博士論文（要旨）

発達障害のある大学生の大学生活支援に関する研究
——大学環境およびスキル・自己理解に焦点をあてて——

2023 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

濱田 里羽

論文要旨

本研究は、発達障害のある大学生の大学生活支援を検討するため、大学環境および学生のスキル・自己理解に焦点をあてながら、以下の研究目的を設定した。

① 発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境と円滑な大学生活のために大学生に求められるスキルや自己理解を明らかにする。

(研究 1)

② 発達障害のある大学生がもつスキルや自己理解が大学環境への適応を通して単位取得や卒業に与える影響を明らかにする。(研究 2)

③ 発達障害のある大学生を含め、大学生の円滑な大学生活のために大学で可能なスキルトレーニングの効果を明らかにする。(研究 3)

④ 発達障害のある大学生が捉えている大学生活における苦戦や重要となるスキル・自己理解と支援ニーズを確認する。(研究 4)

研究 1 では、発達障害のある大学生が苦戦しやすい大学特有の環境および、大学生活で重要になるスキル・自己理解を調査した。全国 780 の大学教職員を対象に無記名式のアンケート調査を実施し、161 校から回答を得た。苦戦しやすい環境については、「主体性が求められる環境」「画一的ではない授業システム」の 2 因子が抽出された。また自由記述から「学生自身で対応しなければならない場面の多さ」等 6 つの大カテゴリーを得た。また学生に重要なスキルでは「大学コミュニティとつながるスキル」「読み書きのスキル」「主体的に取り組むスキル」「健康的に生活するスキル」の 4 因子が抽出された。また自由記述から「困難な場面に対応するスキル」等 5 つの大カテゴリーを得た。自己理解については自由記述から「自分の特性の理解」等 3 つの大カテゴリーを得た。

研究 2 では 600 名の大学生を対象に Web アンケートを実施した。発達障害傾向高群は低群に比べ、「単位取得状況」「主観的な卒業可能性」が低いことを確認した。スキルは「学修に取り組むスキル」「主体的に取り組むスキル」「心身のバランスを保つスキル」の 3 因子、自己理解は「自己理解」の 1 因子構造であることを確認した。また大学環境での苦戦は「自己表現やコミュニケーションを求められる環境での苦戦」「複数のリソースから選択が求められる環境での苦戦」「臨機応変な対応が求められる授業環境での苦戦」の 3 因子を抽出した。また、発達障害傾向低群は「学修に取り組むスキル」が「単位取得状況」および「主観的な大学卒業可能性」に直接影響を及ぼしていた一方、発達障害傾向高群は「学修に取り組むスキル」の「単位取得状況」および「主観的な大学卒業可能性」への直接的な影響に加え、「主体的に取り組むスキル」が「自己表現やコミュニケーションを求められる環境での苦戦」を介して「主観的な大学卒業可能性」に影響を及ぼしていた。

研究 3 では研究 2 の結果を受け、筆者が A 大学で行った時間管理スキルおよびコミュニケーションスキルの育成を目的とした 2 つの学生支援プログラムの有用性を再分析した。各プログラムは一定の有用性を確認できたが、参加の継続や参加に消極的な学生へのアプローチが課題となった。

研究 4 では学生への聞き取りを通して、本研究で用いた大学生活における苦戦および重要となるスキル・自己理解の項目が概ね妥当であることを確認した。また学生はそれぞれに大学適応のための工夫を見つけていること、学生支援部署における個別の相談をはじめとした教職員とのつながりが学生を支えることが明らかになった。一方で教職員の対応や情報提示の方法といった学内システムに課題があることも確認された。